

日時=18-3-12 (日曜日=雨天予備日18日)
 乗車券=ホリディパス(2300円)
 往路=15分前集合

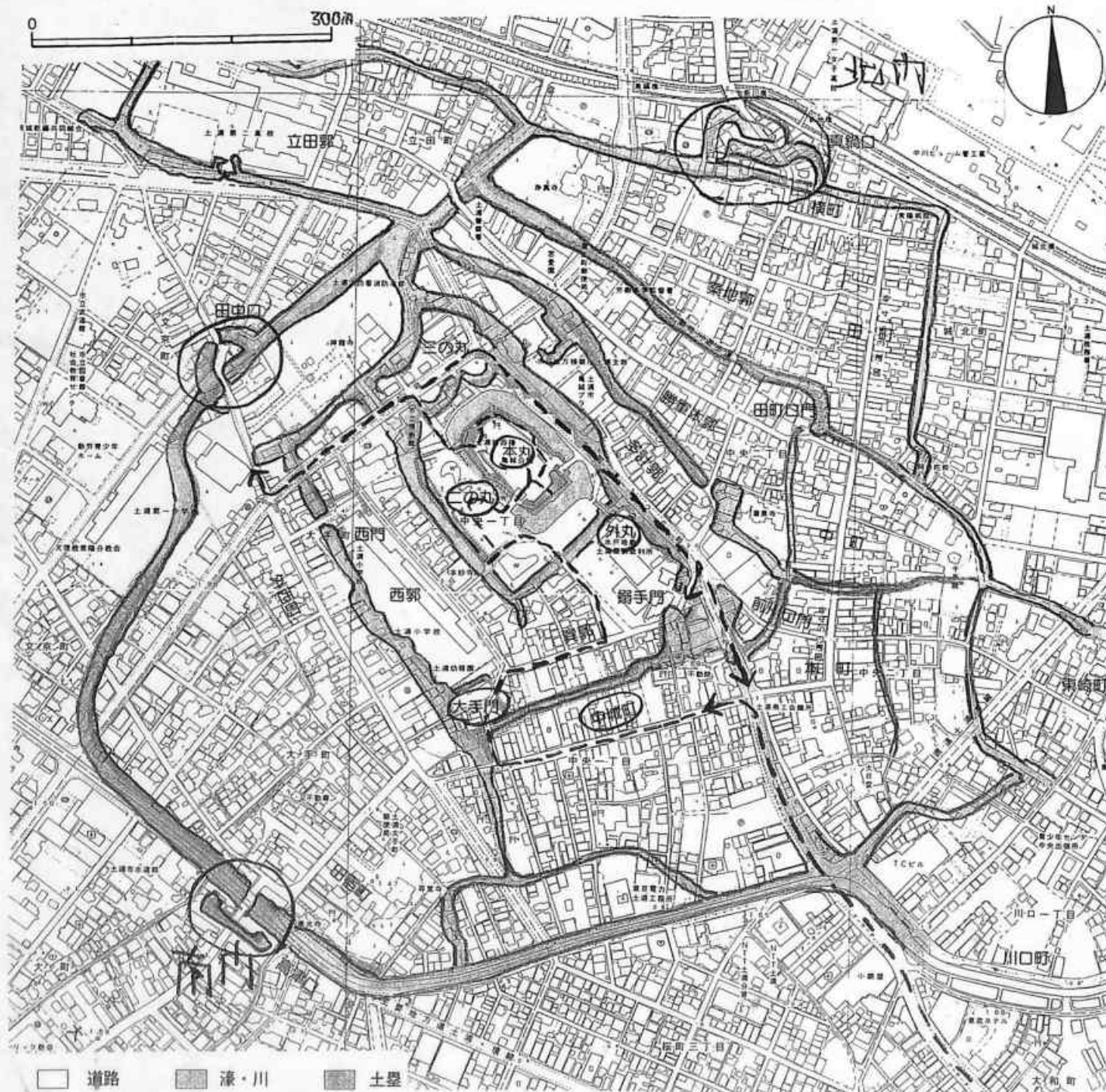
18-3

八幡宿7時55分(各駅)蘇我8時02分着
 蘇我 8時14分(京葉線各駅)南船橋④番線33分着
 南船橋8時39分(②番線武蔵野線)新松戸9時01分着
 新松戸9時09分(①番線常磐各駅)柏18分着(トイレ)
 柏 9時38分(④番線いわき行)土浦10時23分着
 (ダイヤ改定のため当初案内と微妙な差があります)
 復路=土浦16時16分(往路を逆走)八幡宿18時20分ころ着
 (土浦、前後の電車15時37分、57分、16時37分)
 お弁当=土浦駅で購入できます
 注意事項=集合時間などすべて自己責任です

日時=18-5-9 (火曜日=雨天予備日16日)
 購入乗車券=八幡宿→東京(820円)
 往路=15分前集合、八幡宿8時09分(各駅)蘇我8時16分着
 蘇我29(または36)分(京葉快速前の方乗車)東京9時20分
 ころ着
 復路=東京16時30分ころ(京葉線)17時30分ころ八幡宿着
 主なコース=東京駅、吉良邸跡、一石橋、日本橋、常盤橋御門(昼食)、
 日本銀行、貨幣博物館(無料)、東京駅、功名が辻山内一豊邸跡
 募集人数=30人程度、申し込みは4月10日までに担当世話人へ
 参考「八幡公民館主催事業」山岸担当講座
 9月12日、10月17日、11月14日=一般向け講座「八幡史楽館」
 7月19日、10月20日=女性セミナー講座とバス「江戸大名庭園」
 8月8日=夏休み小中学生向け講座「八幡の歴史」
 募集要綱などの詳細は公民館のお知らせを参照ください

ご案内=山岸弘明

- 土屋9万5千石老中城=総曲輪、土と水濠の土浦城



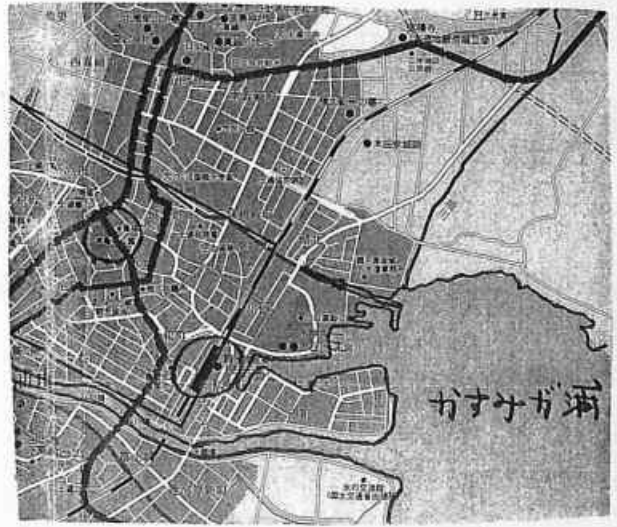
土浦駅

近世の城主	
寅直	松平(藤井) 信一
泰直	西尾忠永
政直	植昌 土屋数直
松平(大河内) 信興	朽木植綱
植昌 土屋数直	政直
松平(大河内) 信興	土屋
泰直	英直
政直	篤直
松平(大河内) 信興	彦直
植昌 土屋数直	寛直
松平(大河内) 信興	壽直
植昌 土屋数直	直



土浦駅

←↓ 現況図



主要引用文献=
 発掘された土浦城、市調査報告書など

江戸後期の城図



1) 土浦城の歴史
 中世小田氏、佐竹氏支城とされるが創建は未詳。天正18年の徳川家康関東入府後、結城秀康支城をへて松平藤井、朽木、土屋、松平大河内氏と変遷、江戸中期の貞享4年、老中土屋政直が9万5千石で再封、以来土屋氏10代180年間の居城として明治維新に至った。
 土浦城が近世城郭としての体裁をととのえるのは松平信一が城主となった慶長5年以降のことで、土屋氏の時代に大規模な改造工事が行われた。城は南西部を霞が浦に接した低湿地に立地し、水濠水源はその支流で防御と水路としての機能を備えた。その縄張りは本丸、2の丸を中心とした輪郭式で、町屋を城内に取り込んだ総がまえに特徴がある。水戸街道の江戸側、城下町入り口の南門はその前面に巨大な角馬出しを、水戸側北門は二重馬出し、西門田中口にも丸馬出しを配し、虎口を嚴重に固めた。城主郭部分を亀城公園として保存、太鼓門、東櫓、西櫓、藩校正門、前川口門などを現存または復元している。天守閣のない関東特有の土の城だが、水濠、土塁、道路の屈曲などが当時の面影をいまに伝えている。

2) 亀城通りと桜橋
 土浦駅下車。亀城通りを亀城公園めざす。通りは桜川跡でほどなく霞が浦に注いだ。慶長18年幕府の直営工事として桜橋をかける。川は昭和9年埋め立てられ現在は暗渠だが、記念の親柱を道路反対側から遠望する。

3) 水戸街道旧道
 江戸日本橋から水戸30里(およそ120km)を結ぶ12番目の宿場で、南側を「江戸みち」北方向を「水戸道」という。往還は城の主郭部東脇を迂回しながら回る。沿道に田宿、中城、本町、仲町、田町、横町の町屋が続き、かつて本陣2か所、継ぎ立て問屋場、旅籠、商家、茶屋が軒を並べた。

土浦まちかど蔵「大徳」のご案内

江戸時代後期の建築物，元蔵は1842年（天保13年）

見世蔵（約380㎡）（以前は店舗として使用）

- 1階 観光物産館，観光案内所
和室 休憩所
- 2階 多目的室（貸し出し，事前申請が必要）
和室（ " ）
- ※見所 1階・梁組み
2階・10畳和室のザクロの床柱
・10畳和室の杉材の天井板
・縁側の近江八景の木彫欄間
・8畳和室床の間の天井竿縁のねじれ加工

袖蔵（約100㎡）（以前は直ぐ販売できる商品の保管用として使用）

- 1階 土浦市の観光展示
花火…土浦全国花火競技大会 日本三大花火（新潟長岡，秋田大曲，茨城土浦）の1つ。
日本全国の花火師が競い合う大会。
毎年約70万人の観客，10月第一土曜日に開催。
帆曳船…毎年7月21日から10月中旬の金，土，日，祝日に運航。
随伴船：ホワイトアイリス号（京成マリーナ）13時30分の便
 ジェットホイルつくば号（常陽観光）13時25分の便
ハス…ハスの花は7月中旬から8月中旬まで見ることができる。
木田余，手野，田村，沖宿地区

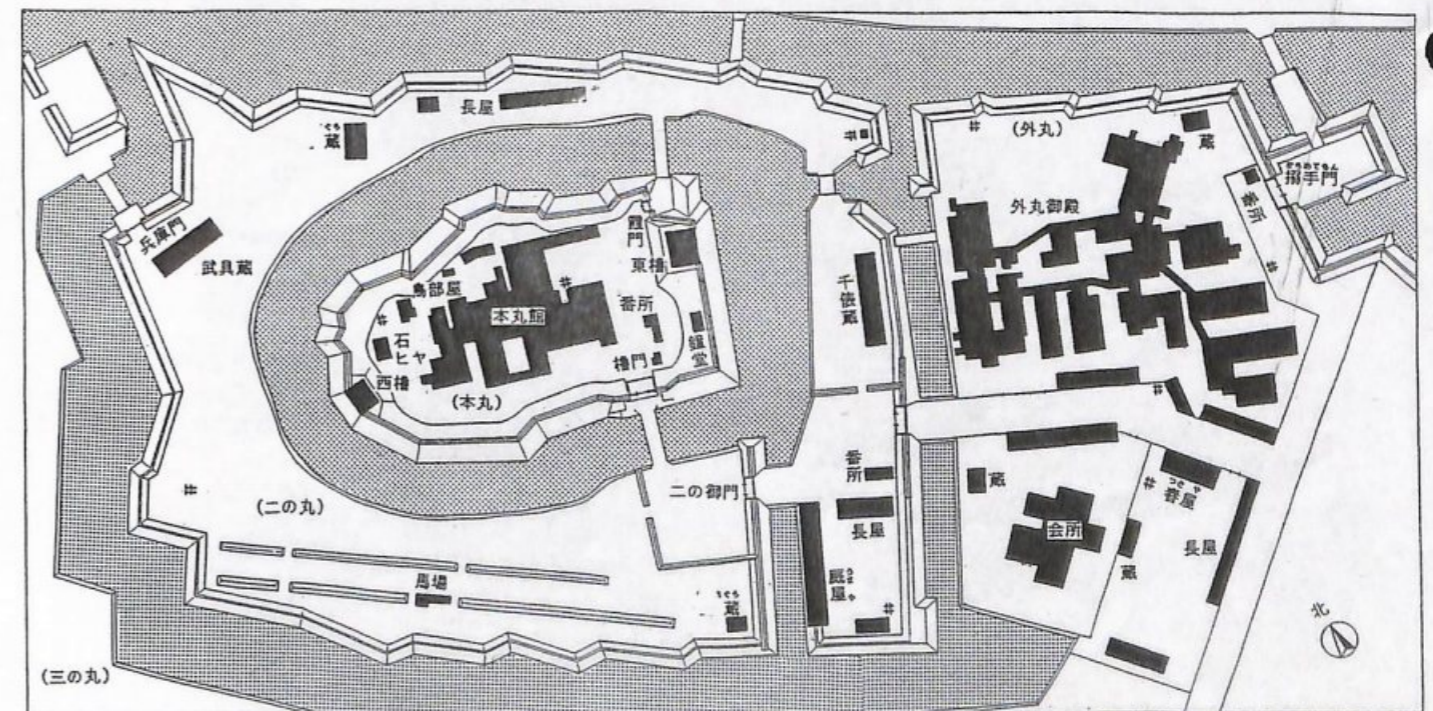
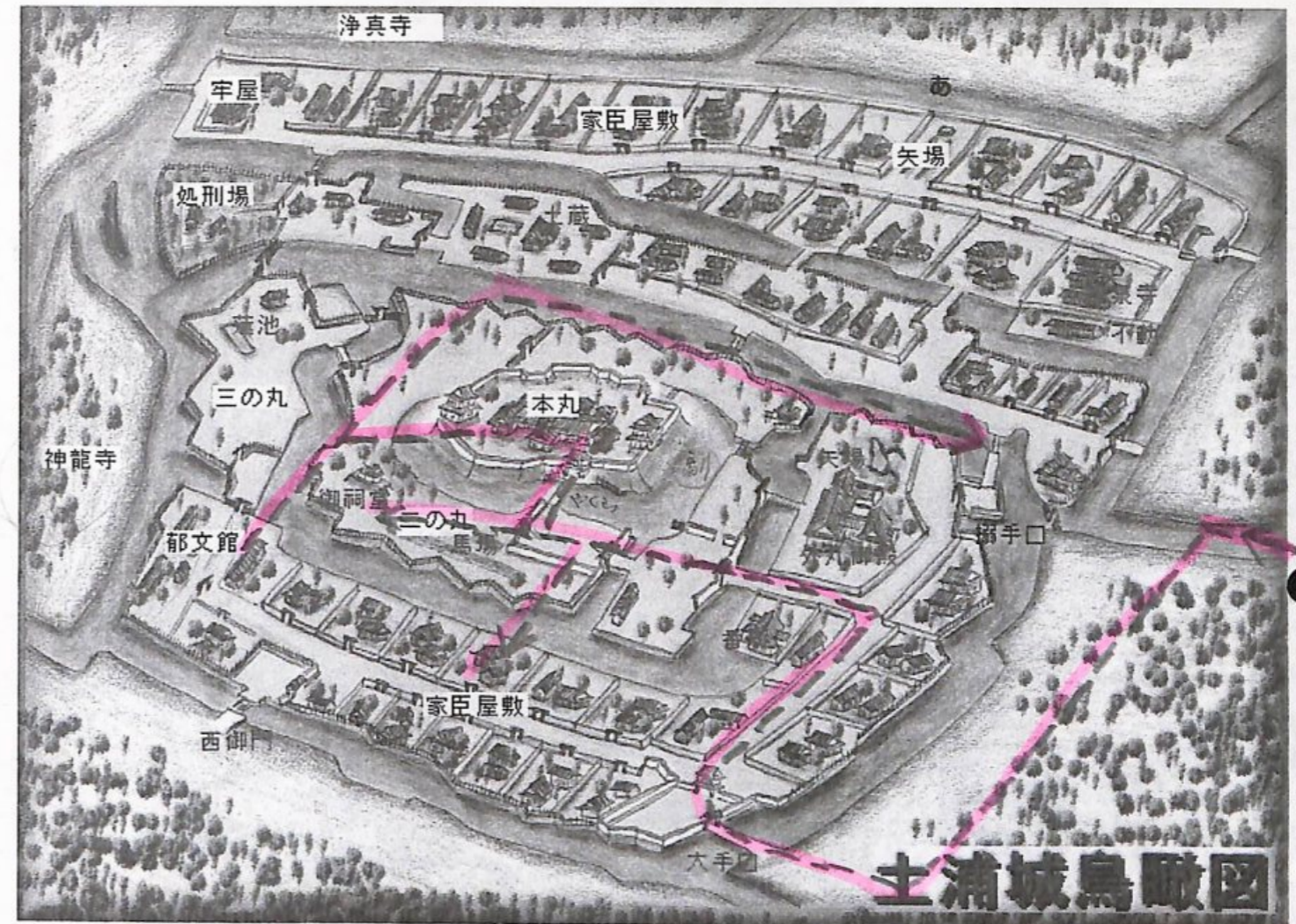
2階 商家歴史の展示（大徳，中城通り）

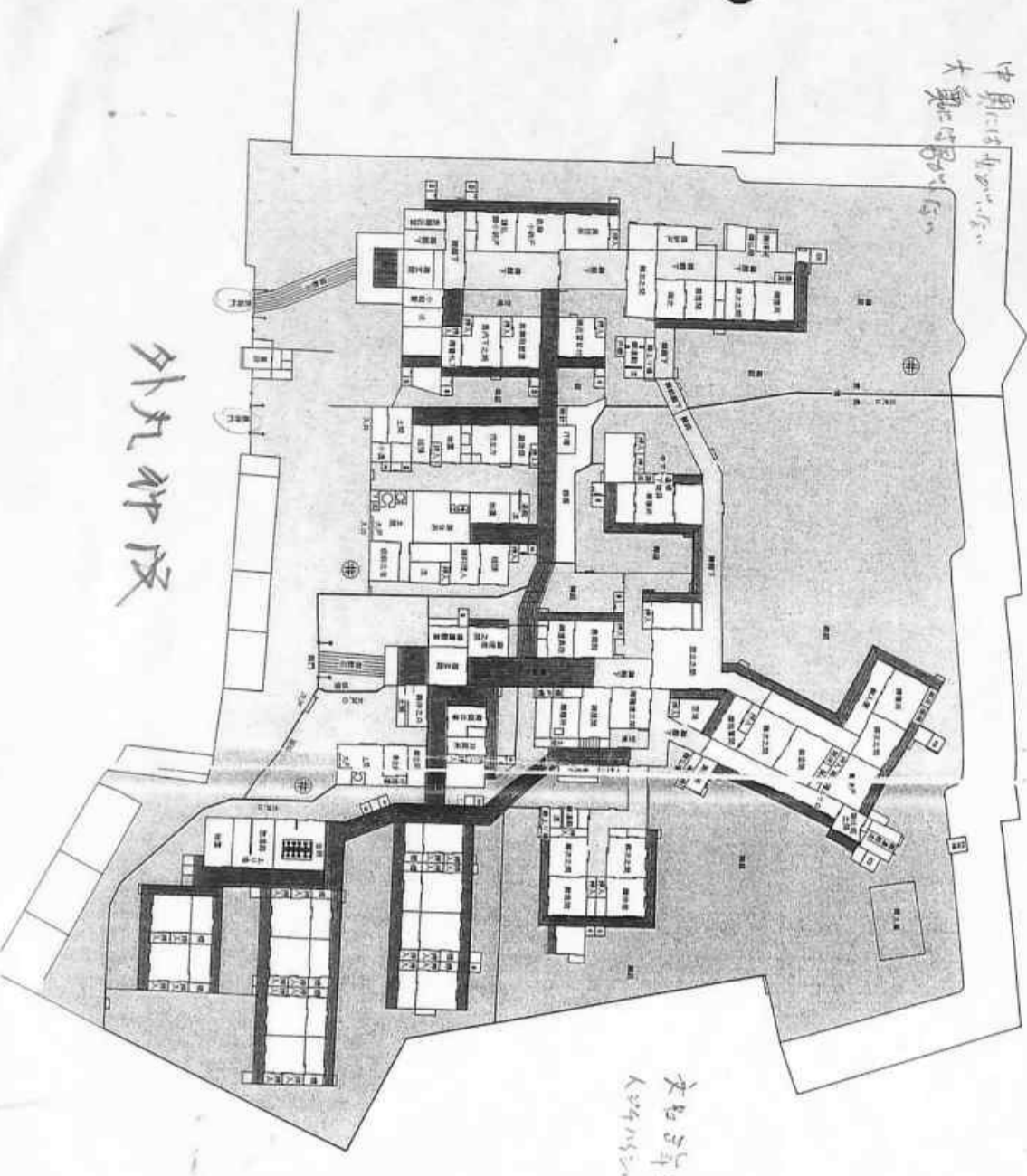
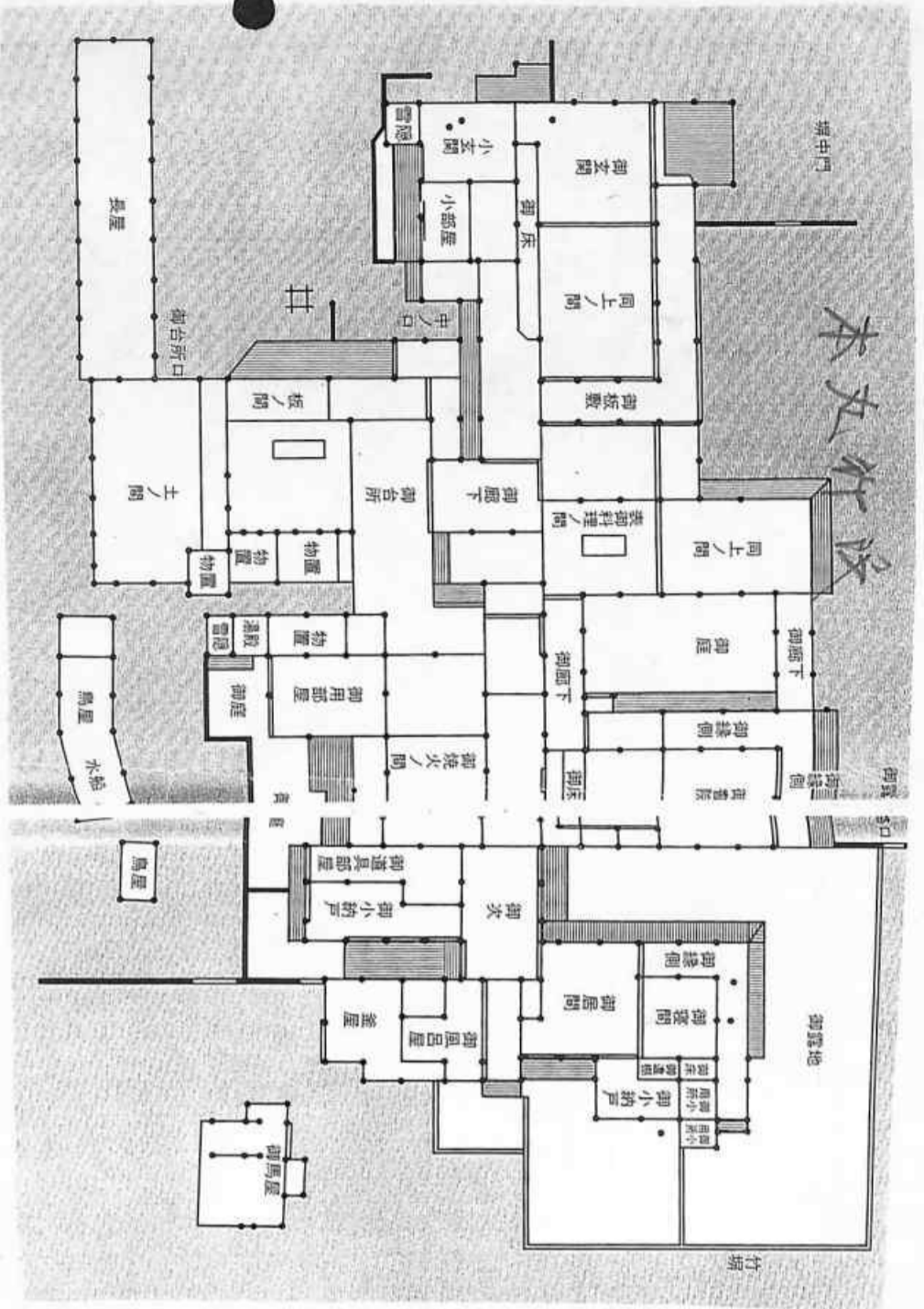
元蔵（約40㎡）（以前は商品のストック用として使用）

向こう蔵（約70㎡）（以前は家財道具その他の収納庫として使用）

土浦の近世の町屋は，間口が狭く奥行きが深い『鰻の寝床』と称される典型的な近世町屋の宅地割となっており，間口四間（約7m）未満の町屋が半分以上を占めている。

また，敷地間口いっぱい店（見世）を構える形式と店（見世）脇に袖蔵を設ける形式があります。概ね前者の場合は木造系統で，後者は「大徳」に見られるような土蔵造りです。





1 土浦城の歴史

守りやすく 攻めにくい水城

土浦城が最初に築かれたのがいつなのかは明らかではありませんが、室町時代の永享年間(一四二九~一四四〇)に若泉氏が築いたものと考えられています。戦国時代には小田氏、菅谷氏の居城として戦火がくり広げられました。

江戸時代になると、土浦城は代々の領主によって整備されました。慶長九(一六〇四)年松平信吉が領主の時には水戸街道が整備され、城下町の基礎が整えられました。元和六(一六二〇)年から七年にかけては西尾忠昭によって東西の櫓が、明暦二(一六五六)年には朽木種綱によって時を知らせる太鼓が置かれた。

土浦城は別名亀城と呼ばれていますが、これは城が幾重もの堀に囲まれており、その姿が水に浮かぶ亀のように見えたためであるとされています。土浦城の特徴は亀城の名からも推測できるように、霞ヶ浦と桜川によってできた低湿地の中の微高地を巧みに利用した水城であり、守りやすく攻めにくいことでした。江戸時代になり政治が安定してくると、城の性格も皆から政治の中心地へと変わります。土浦城は藩主の居城、藩の役所として機能しました。

フィールド博物館・土浦のしおり

2 城下町土浦

江戸時代五千人が住んでいた

戦国時代が終わる頃、土浦は東崎、中城の二つの集落からなる小さな村にすぎませんでした。しかし、江戸時代に入り、土浦城主によって城下町が整備されると次第に町の人口が増え、商工業を営む人々も現れました。慶長九(一六〇四)年に水戸街道が城下を通ると、沿道には田宿、中城、本町、中町、田町、横町の町家が整備されるとともに、藩士の居住地として勝軍木郭(旧鷹匠町)や西郭(旧内西町)が開かれ、武家町が整備されています。貞享元(一六八四)年には、土浦城郭の修復と同時に、城下町の防御施設として「枳形」と「馬出し」が設けられ、享保年間(一七一六~一七三五)には、新たな武家屋敷として立田郭、大町や川口町などの町家も創設されています。江戸時代後期の農政家長嶋尉信の著した「おだまき」によると享保六(一七二一)年の土浦の町人人口は二千二百八十六人でしたが、約二〇年後の天保一〇(一八三九)年には五千九十八人と二倍以上に増加していることがわかります。

フィールド博物館・土浦のしおり

3 土浦城と門

道を大きく曲げた 馬出し

城下町土浦の出入口には、それぞれ北門、南門、西門が設けられ、城に入っていく門として中城と内西町との境には大手門、田町と鷹匠町との境には田町門(別名あかずの門)が設けられていました。各門には番所が置かれ、番役人が配備されていました。真鍋村へ続く北門は、城下町の北の出入口にあたり、門の前の道はS字型に大きく曲げられており、これは「馬出し」と呼ばれる防御施設でした。道を曲げることで、城下に進入する者の速度を弱めることができるからです。南門は城下町の南の出入口にあたり、田宿町と大町との境に位置していました。北門と同様水戸街道上の出入口にあたり、門の前には養子橋と「枳形」という防御施設を備えていました。「枳形」は別名を「角馬出し」ともい、やはり道が大きく曲がっていました。西門は南北両門に比較して規模の小さい「馬出し」と木戸門でできていたようです。現在、いずれの門も残っていませんが、大きく曲げられた道や石碑、標柱にその名残をみることができ

フィールド博物館・土浦のしおり

物見櫓と西尾氏

復元された西櫓

土浦城本丸の土塁の上には、東西におのおの二層の物見櫓がありました。この物見櫓は江戸時代の初期、時の土浦城主西尾忠照が元和六(一六二〇)年から七年にかけて築造したものです。残念ながら、東櫓は明治十七年に焼失、西櫓も昭和二十四年のキティ台風により破損したため取り壊されてしまいました。しかし、西櫓については、平成二年に復元され、木立の中に往時の姿を偲ばせています。土浦城のような平城では、土塁の上の二層の高さで物見の役目は果たせたものと思われれます。



西尾氏は清和源氏の子孫で、戦国時代末には齊藤道三、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕え、忠照の父忠永が大坂の陣における功によって、元和四(一六二八)年土浦城主に封ぜられ、二万石の大名となりました。忠永の没後、忠照があとを継ぎ、元和六年から慶安二年(一六四九)駿河国田中城に移封されるまでの三十二年間、土浦藩主として城下町の整備や土浦地方の支配を行いました。

太鼓櫓と朽木氏

城下に時を知らせた櫓門

土浦城の櫓門は、本丸、二の丸の遺跡とともに県の花火財に指定されていますが、城郭建築の遺構としては関東地方唯一のものであり、土浦城の象徴となっています。この櫓門は、もと本丸の櫓門であったものを明暦二(一六五六)年、時の城主朽木植綱が瓦葺入母屋造り単層の櫓門に改築したものです。太鼓櫓の別称は二階に太鼓を備え、定時になると打ち鳴らされたのでこの名が生まれたといわれています。朽木氏は宇多源氏の流れをくむ佐々木信綱の子高信が、近江国高島郡朽木谷に住み、朽木氏を称したのに始まります。植綱の父元綱は、



足利義昭、織田信長に仕え、慶安二(一六四九)年に下野国鹿沼城主二万五千石から三万石に増えられて土浦城主となっています。植綱とその子植昌は約二十一年間土浦城主として、土浦城の修築をはじめ、待屋敷を外西町に広げるなど城下町の形成に力を尽くしました。

土浦藩主土屋氏

藩主は老中

土浦藩は譜代大名が代々の藩主となり、五氏十九代を数えました。土屋氏は寛文九(一六六九)年に初めて土浦藩主となり、五年間の松平信興時代をはさんで明治維新に至るまで土浦地方を支配しました。土屋氏は戦国時代、甲斐の武田氏に仕えた武田二十四将の一人で、武田氏の没落後、関ヶ原の戦いで功をたて、徳川家康に譜代大名に取り立てられました。土浦土屋氏二代政直(一六四一〜一七二二)は大坂城代、京都所司代を歴任し、貞享四(一六八四)年、老中になっています。政直が老中在職中、赤穂四十七士の討ち入り事件にあたり

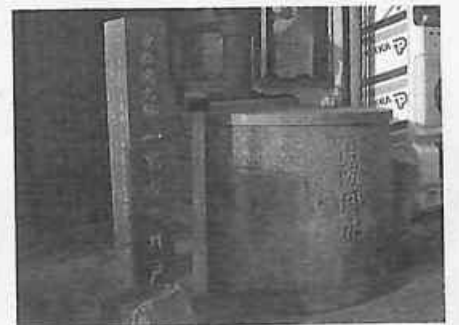


って、情理を兼ねた採決をしたといわれています。十代寅直(一八二〇〜一八九五)は、優秀な人材の登用や財政改革、産業の奨励など様々な政策を打ち出し、藩政の改革を行っています。また、開国が攘夷かという激動の幕末、土浦藩は徳川家の譜代大名であり、水戸藩とも縁戚関係でありましたが、寅直の元で藩論は新政府側に統一され明治維新を迎えました。

水戸街道と土浦

日本橋から十八里半

水戸街道は、水戸路または水戸道とも呼ばれ、日本橋を起点に水戸とを結ぶ行程約三十里の街道で、土浦北門から北を水戸道、南門から南を江戸道とも呼んでいました。水戸街道の開通は慶長九(一六〇四)年藩主松平信吉の時といわれ、沿道に田宿、中城、本町、仲町、田町、横町の町屋が設けられ、土浦宿が整備されました。土浦宿には、大名の宿泊所となる本陣が本町の山口家と大塚家



の二カ所に設けられたほか、旅籠、問屋、商家、茶屋などが軒を連ねて大いに賑わったと伝えられ、今もその繁栄ぶりを示す蔵造りなどの古い家並みを見ることが出来ます。土浦宿は日本橋から十二番目の宿場です。距離的には十八里半に位置しており、現在大町に残っている「一里塚の井戸」は日本橋から十八番目の一里塚があったところですが、土浦市内には、土浦宿のほか、荒川沖宿、中村宿、中貫宿がありました。

桜橋の跡

川が流れていた亀城通り

土浦城下に水戸街道が開通したのは慶長九(一六〇四)年頃のことですが、この時点で、城下を流れる桜川や旧桜川、南門外の堀川には橋が架けられていませんでした。これらの川に橋が架けられたのは少し遅れた慶長十八(一六三三)年のことです。桜川には銭亀橋、堀川には簀子橋(竹の簀子で作った橋で、非常時にはすぐ撤去できた)、旧桜川には桜橋(正式には桜川橋が幕府の直営工事に)より同時に架けられました。旧桜川は、現在、河道が埋め立てられて暗渠となっており、亀城通りをながれていました。桜橋は、この亀城通りの開通した昭和九年に



取り除かれて今は名前を残すだけですが、かつて橋のたもとに置かれていた親柱が中城の不動尊の参道に据えられています。なお、現在桜橋の跡は土浦の道路の基点となっており、道路原標が建っています。

藩校郁文館

藩士子弟が学んだ文館と武館

江戸時代、大名はそれぞれ藩校を設置して藩士の子弟の教育に力を注いでいます。明治四年の廃藩までに設置された藩校の数はおよそ三百といわれています。茨城県内にも水戸藩の弘道館、笠間藩の時習館、古河藩の盈科堂など十五の藩校がありました。土浦藩では、寛政十一(一七九九)年土屋家第七代藩主英直によって、城内二の丸に藩校郁文館が創設されました。「郁文」とは「論語」からの引用で、学問や教育の盛んな様子を意味しています。郁文館は文館と武館に分かれており、文館では四書五経などの漢学が中心に教授され、武館では剣術、槍術、柔術、居合術



などが盛んに行われました。しかし、郁文館での教育も時の経過とともに次第に不振となっていききました。第十代藩主寅直は藩学教育の改革に着手し、天保十(一八三九)年郁文館を城外の神籠寺門前に移して再建するとともに、大久保要や藤森弘庵などの優秀な人材を教授として採用し、学問と心身の鍛錬を奨励したので、藩学教育は再び盛んになりました。郁文館の正門だけが、現在の土浦第一中学校の構内に現存しています。